

死後の世界をどう考えるか

— 東洋思想の死生観から見えてくること —

The Problem of the Life after Death:
A Study of The View of Life and Death in Asian Thought

三 浦 宏 文

共通教育非常勤講師

抄録 :

私たちが生きる現代は、医療などの発達で生と死が見えにくくなった時代である。しかし人間の生命は有限であり、死という問題を避けて通ることは出来ない。本稿では古代インド思想や仏教、そして日本神話の死生観・他界観を手がかりとして、この生と死の問題にどう立ち向かうかを考察した。そして、ホーキングやマルクスの宗教批判を踏まえた上で、死後の世界を考えることの新しい可能性を、緩和医療との関連性から再検討した。

Abstract :

The present age is the time when people cannot meet with 'pure death itself' easily because of development of medical science. Human beings, however, must see the problem of death. In this paper, the author intends to examine the problem of the life after death in Asian thought, which is Hinduism, Buddhism and Japanese myth, and discuss its necessity and validity. In addition to this, our concern is to consider a new possibility of thinking the life after death in palliative care, with the examination of the religious criticism by Marx, H. H. and Hawking, S..

キーワード : 死後の世界、他界観、インド思想、仏教、日本神話

Key words : life after death, the view of life and death, Indian thought, Buddhism, Japanese myth

生と死が見えにくくなった時代に

私たちが生きる現代は、生と死が見えにくくなった時代である。多くの人は病院の清潔な環境で生まれ、血や胎脂をふき取られた姿の兄弟姉妹や我が子と出会う。死ぬ時も多くは病院の中で迎え、遺族は死に化粧を施された遺体と対面する。なまの生や死にはなかなか出会うことはない。

いや、それ以前に医療が進みさまざまな病気が克服された今、肉親や親しい人の死自体に会うことが少なくなっている。以前は、少年期までに肉親のいずれかの死に必ずと言っていいほど出会ったものだったが、現在では成人していても肉親の死に一度も経験していない若者も珍しくない。

しかし、この度の地震や津波といった大災害を目の当たりにすると、あらためて人とは実は死んでいく存在であることを思い知らされる。そして、超高齢化社会の道を確実に歩んでいる日本社会では、生と死という問題は避けて通れない課題でもある。

はたして、この大きな課題に私たちはどう立ち向かっていけばよいだろうか。本稿では古代インド思想や仏教思想を一つの手がかりとして、この生と死の問題にどう立ち向かうかを考察してみたい。

1. 死のとらえ方の二つの見方

インドの古代思想には、死に対する向き合い方の代表的なものとして二つの方針がある。一つは「死を見つめそれを乗り越えること」でありもう一つは「死後の世界（来世）を考えること」である¹。

1-1. 死を見つめそれを乗り越えること

「死を見つめそれを乗り越えようとする」ことを説く代表が仏教である。事実をありのままに見知ること（如実知見）から出発した仏教は、人間は死すべき存在であることを自覚するべきだと解く。例えば原始仏典には、こういう記述がある。

[世尊いわく] 生命は[死に] 導かれる。寿命は短い。老いに導かれる者には救いがない。死についてのこの恐ろしさに注目して、世間の利益を捨てて静けさを目指せ²。

また別の箇所にもこのような記述もある。

世尊はこう言われた。修行僧達よ、この人間の寿命は短い。来世には行かねばならない。善を為さなければならない。清浄行を行わなければならない。生まれたものが死なないということはあり得ない。たとえ長く生きたとしても百歳かそれより少し長いだけである³。

基本的に仏教においては、この世の全てのものは「無常」であり、滅ぶべき性質のものである。したがって、人間も「無常」な死すべき存在である。この「無常」という真理を悟ることで死の恐怖や不安を乗り越えようとするのである。これは仏陀時代の根本仏教や原始仏教、部派仏教までのいわゆる「小乗仏教」と呼ばれる時代の仏教が考えていた死に対する向き合い方である⁴。

この「小乗仏教」と呼ばれる時代の仏教は、輪廻することそのものが迷いの生存と考え、そこから脱却するためには心も身体も全くの無に帰すること（灰身滅智）が必要と考える。そうすることによって、無余涅槃という完全に輪廻を脱却した境地に至ることがこの時代の仏教の目的であった⁵。

1-2. 死後の世界（来世）を考えること

これに対して、死の恐怖や不安を乗り越えるもう一つの道として死後の世界、すなわち来世や

他界を考えるとという死との向き合い方も出てきた。この「死後の世界（来世）を考える」という死への向き合いの方が、どちらかという人間の心の働きとして多く見られ⁶、古代インドの神話やバラモン教・ヒンドゥー教というインド正統派の諸思想から、いわゆる大乘仏教と呼ばれる民衆の支持を得た仏教諸派までがさまざまな死後の世界（来世・他界）を考察している。以下、まずインド思想・仏教の他界観・来世観を見ていきたい。

2. インド思想・仏教の他界観・来世観

2-1. 天界（ヤマの国）と地下界 — インド思想の他界観・来世観 —

古代インドの聖典『リグ・ヴェーダ』には、死者の行く天界のヤマの国の記述がある。ヤマは最初の人間である。神は不死であるが、人間はそうではない。そこでヤマは最初の死者となり、天界に死者の国を切り開く。その王国は、一種のパラダイスであった。このヤマは、後に地獄の閻魔にもなる⁷。

もちろん、古代インド人も全ての死者が天界のヤマの王国に行けるとは思っていなかった。同じく古代インドの聖典『アタルヴェア・ヴェーダ』では、悪事を行った者が行く所としてナラカ（奈落）を挙げている。ただし、このようなヴェーダ聖典では組織的な地獄は考えられていなかった。まとまった地獄（ナラカ）の概念が出てくるのは、ヒンドゥー教の時代になってからである⁸。

2-2. 大乘仏教の他界観

いわゆる「小乗仏教」と呼ばれる時代がすぎると、民衆の信仰を背景として新しい仏教、「大乘仏教」が起ってきた。「大乘仏教」は、自分が悟りを得るだけでなく、他人をも救うことが強調した。この「大乘仏教」では、仏になることを目標とし、他人を救うためには自ら進んで迷いの世界には行って行く願と行とを立て、人間もあらゆるものも全ては空であり、苦の根源をなす執着の対象となるべきものは本来存在しないとする。そして、そのあらゆる執着を越えてしかも他者に救済の手を差し伸べる利他に徹する菩薩の精神が強調された⁹。そして、衆生に対して様々な他界を提示した。

2-2-1. 西方の極楽浄土

浄土経典では、阿弥陀仏の浄土である極楽浄土を説く。『無量寿経』という経典によれば、ある国王が出家して法蔵と名乗り、自ら衆生の救済者となろうと決意して四十八の誓願を立て長い修行を経た後に阿弥陀仏となった¹⁰。その阿弥陀仏が西方十万億土に建立した国土を安樂世界（極楽浄土）という。そこは七宝で出来た国土であり、気候も常に温暖で快適、金の樹木に銀の葉や花・実がつく清浄な世界である。

衆生は、阿弥陀仏の誓願にしたがってその仏の名を聞いて信じ喜び、一念の念仏をすればその国に往生できる。また出家したり（上輩）、多少の善を修し（中輩）、あるいは菩提心をおこして（下輩）無量寿仏（阿弥陀仏）を念ずると往生することができ、浄土の世界で不退転に住し仏となることが出来る¹¹。

2-2-2. 東方の浄瑠璃世界

また『葉師瑠璃光如来本願功德経 (葉師経)』という經典では、東方に浄瑠璃世界があり、葉師瑠璃光如来が住するとする。この世界は、「瑠璃を地と為し、金繩を持って道を区分けし、城門や住居楼閣は皆七宝を持って成じ、西方の極楽世界に匹敵する」¹²とされる。

この葉師瑠璃光如来は、もと菩薩道を行じていた時十二の大願を發した。それは、仏となった時には無量の世界を照らす光明を得て(第一大願)、瑠璃のような清らかな身体を得て(第二大願)、無限の智慧と方便をもって衆生のあらゆるものを得しめ(第三願)、あらゆる衆生苦を菩提の道に住せしめ(第四願)、梵行を修するものに戒をそなえしめ(第五願)、病害あるものを端正にして智慧を得しめ(第六願)、病気に攻められるものに自分の名を聞けば身心安楽にして資具を満足させ、悟りを得しめ(第七願)、女身を捨てたものには皆男性とならせ(第八願)、悪見のものを正見におき、悟りを得しめ(第九願)、投獄などの災難によって苦を受ける時、自分の名を聞けば憂苦を脱せしめ(第十大願)、飢渴に悩む者に上妙の飲食を与え(第十一大願)、衣服なき者に上妙の衣服かざりを得させん(第十二大願)と誓い、また信心あるものはかの世界に生まれんと願うべし、とするものである¹³。この願自体は、どちらかというと現世利益的に見える¹⁴。

2-2-3. 『法華経』の靈山浄土¹⁵

さらに『法華経』¹⁶では、インドに生まれた釈尊の本地は永遠なる(久遠実成)仏であって、釈尊が涅槃を示したのは衆生を導く方便にすぎないと述べられ、法華経説法の靈鷲山がそのまま浄土にほかならないことを述べられている。この地について如来寿量品では「安穩にして天人常に充滿し、園林諸堂閣種々の宝莊嚴あり、宝珠花果多く衆生の遊樂する所なり」と記している¹⁷。

3. 日本古代神話の他界観・来世観

古代の日本でも様々な他界が考えられた。『古事記』『日本書紀』¹⁸を中心に見てみよう。他界としては、高天原、常世国、黄泉国などがあげられる。それぞれの特徴を見てみよう。

3-1. 高天原

この地上が国つ神の世界と考えられたのに対し、高天原は天上の世界の天つ神の世界である¹⁹。『古事記』によれば、最初に天地の開けた時、国土がまだクラゲのように漂っている時、天之御中主神(あめのみなかぬしのかみ)を始めとする五柱の神が成り、独り神で現し身を隠して現されなかった。次に国之常立神(くにのとこたちのかみ)から伊邪那岐神(いざなぎのかみ以下イザナキ)、伊邪那美(いざなみのかみ以下イザナミ)至る神世七代が成った。この最後のイザナキ・イザナミが結婚して国産みをし、また様々な神を産んだ。イザナミは最後に火の神火之迦具土神(ひのかぐつちのかみ)を産んだ時、女陰をやかれて死ぬことになる²⁰。

イザナキが左の目を洗った時に天照大神(あまてらすおおみかみ)、右の目を洗った時に月読命(つくよみのみこと)、鼻を洗った時に武速須佐之男命(たけはやすさのおのみこと)がなり、それぞれ高天原、夜の食国(おすこく)、海原を治めることを任された²¹。高天原は、こうして神々

の成る世界で天照大神の治める世界となった。この世界は、例えばスサノオが姉のアマテラスに会いに登っていったり、逆に追い出されて出雲に下ったりしているように他界とは言え、行き来が可能な世界でありこの世と隔絶された世界ではないと考えられる²²。

3-2. 常世国

海上遠くに、理想郷ともいえる常世国が信じられていた。神産巢日神（かみむすひのかみ）の子、少名毘古那神（すくなびこなのかみ）は大国主神とともに国をつくり堅めた後、常世国にわたった。垂仁天皇は、「ときじくのかくのこのみ（常によい香りを放つ木の実、橘）」を求めて多遅摩毛利（たじまもり）を常世国に派遣したが、木の実を持ち帰った時天皇は既になくなっていった²³。

『日本書紀』では、「この常世国は神仙の秘区（かくれたるくに）、俗（ただひと）のいたらむ所にあらず」²⁴、浦島伝説に関して「蓬莱山（とこよのくに）にいたりて仙衆をめぐりみる」²⁵とある。

この常世国も、永遠なる理想の世界でありながら行き来できる世界でもあった。ただし、神仙界＝常世の不死の世界は実は現世の世の否定すなわち死によって得られるものであるともいわれる。したがって、他界の性格も持っていたと言える。

3-3. 黄泉国

死者の国として黄泉国が、イザナキが亡くなった妻イザナミを追いかけていったエピソードに出てくる²⁶。イザナミは前述したように最後に火の神火之迦具土神（ひのかぐつちのかみ）を産んだ時女陰焼かれて亡くなってしまった。イザナキは嘆き悲しみ、死者の国である黄泉国に会いに行ってしまう。そして再会したイザナミに帰るように迫るが、イザナミはすでに黄泉国の食べ物を食べてしまい黄泉国の住人になってしまった。ただ何とか方策を考えるので、それまで決して自分の姿を見てはいけないという。しかし、イザナキは約束を破り、ウジが湧き恐ろしい姿になっていたイザナミを見てしまう。これに怖れをなしてイザナキは逃げるが、イザナミは恥をかかされたとして激怒して追いかける。そして、やっとの思いで黄泉平坂に千引の岩を引いてきてふさいだという。

ここにもやはり黄泉国が現世と行き来できるという発想を見て取れる。同時にそこは死者の赴く国であり、死者は黄泉国の食べ物を食べてしまうともう戻ることは出来ない世界であると考えられていたのである。

このように、高天原や常世国は神の住む天上界であり、あるいは海の彼方にある永遠なる理想世界である。これに対して、黄泉国は死後の世界であるのだが、死穢に満ちた世界であるとされる²⁷。そして、興味深いのはインド思想や仏教の他界観と違ってこの日本の他界観では、善人も悪人も区別なく全ての人は死して黄泉の国へ赴くことになるのである²⁸。

4. 死後の世界を考えることに意味があるのか

以上、死への二つの向き合い方として「死を見つめそれを乗り越えること」「死後の世界(来世)を考えること」の二つを取り上げ、それに関連してインド思想・仏教、そして古代日本神話の他界観を見てきた。前者はともかくとして、後者に関するものは、現代の科学的知識を持つ人間にとっては、そのままの形で信じることは難しいものである。それでは、このような「死後の世界を考えること」は、現代においてなんの意味もないことなのだろうか。

4-1. 宗教批判の立場

例えば、一部の科学主義者はこう批判するかも知れない。「死後の世界など存在しない。そのような科学的に証明できないものは存在しない。したがって、死後の世界を考えることは人間にとって全く意味などない。むしろ、害悪を及ぼすものである」と。実際に、今年(2011年)車椅子の物理学者として有名なイギリスの理論物理学者スティーヴン・ホーキングは、人間の脳について「部品が壊れた際に機能を止めるコンピューターと見なしている」という認識を示した上で、「壊れたコンピューターにとって天国も死後の世界もない。それらは闇を恐れる人の架空のおとぎ話だ」と死後の世界やそれを考える意義を完全に否定した²⁹。このホーキングの発言は、西洋の宗教関係者の間でも物議を醸した。

このような宗教に対する批判は、他にも一部の社会主義者などを中心にこれまでかなり激しくおこなわれてきた。例えば、マルクスがその著書『ヘーゲル法哲学批判序論』で「宗教は人民のアヘンである」と述べたことはあまりにも有名である³⁰。では、本当に死後の世界を考えることは無意味なことであろうか。

4-2. インドの医学書『チャラカ・サンヒター』の提案

ここで、インド伝統医学「アーユル・ヴェーダ」の流れをくむ医学書『チャラカ・サンヒター』の立場を紹介したい。『チャラカ・サンヒター』とは伝説的な医学者であるチャラカに帰せられるインドの医学書である。この中でチャラカは、人間が生きて行くために必要なこととして(1)生命を保持しようとする願望、(2)財を得ようとする願望、(3)来世に関する願望の三つをあげている。すなわちチャラカは、「死後の世界を考えること」を人間が健康的に人生を過ごすことにとって必要なことだと述べている³¹。

もともとインド古典医学は、近代的な医学のように局所的な疾患や疾病のみをピンポイントで治して行くことを目指すものではない。人間が身心ともに健康的な人生を生きていくためにはどうすればよいかということを探求することが、インド伝統医学の目的である。したがって、『チャラカ・サンヒター』は医学書であると同時に哲学書・宗教書でもある。

4-3. 結語

たしかに、荒唐無稽な他界観を振り回して、あろうことか営利目的の靈感商法などを行うような宗教は、昔から後を絶たない。そういう悪質な宗教の被害に遭った人々からすれば、宗教的な

他界観に基づく死後の世界を考えると自体に嫌悪感を覚えるかも知れない。そうでなくても、私たち現代人は既に近代科学的な知識を持ってしまっているがゆえに、いまさらそのような宗教的な他界観にそれほど魅力を感じないかも知れない。しかし、自分の身近に死を感じた時、あるいは身近な人の死に出会った時に、私たちは同じように死後の世界にはたして無関心でいられるだろうか。最初に述べた通り、現代ではなまの生と死が見えにくい仕組みになっている。普段「死」というものに接していない現代人ほど、たとえば先の震災のような形で突然「死」を目の当たりにして、激しく動揺するのではないだろうか。

もちろん、同じ宗教でもいわゆる「小乗仏教」と呼ばれる時代の仏教のように「人間は死にゆく存在である」という真理をそのまま受け入れることによって自分の死への不安や恐怖や自分の身近な人の死の悲しみを克服するやり方もあるだろう。この「死への向き合い方」は、ホーキングのような科学主義的な態度とも矛盾しない。

しかし、その方法を受け入れ実践していくには相当な精神的な強さが必要である。実際、仏教でも最終的な「悟り」を得るためには厳しい修行に長い期間耐えなければならない。もちろん今でも厳しい修行に身を投じる僧侶たちは多くいる。だが、全ての人間がそのような修行に耐えられるほどの強さを持ち合わせているわけではないし、そういうことに時間を割けるわけでもない。

こう考えてくると、先ほどのインドの医学書『チャラカ・サンヒター』の言葉が非情に説得力を持って聞こえてくる。この中でチャラカが言うように、私たちが「死後の世界」を考えることは、必ずしも意味のないことではないであろう。そのことによって、身心ともに健康な人生をおくれるようになるのであれば、むしろ必要なことであると言うことも出来る。

前述したマルクスの「宗教は人民のアヘンである」という言葉も宗教そのものを批判したというよりも、このような宗教的言説が現実社会の問題の解決を遅らせるという意味での批判である³²。むしろ私はこのマルクスの発言は、人間が生きる現実社会の変革を怠る理由として宗教的言説が利用される危険性の指摘ととらえたい。そしてその上で、あえてこう反論してみたい。人間が死に行く存在であるということは、どのような社会変革によっても克服できない「現実」である。人間がこの死という「現実」に向きあう時には、社会変革以外の何らかの手法・手段が必要である。

一方で、このマルクスの「宗教はアヘンである」という言葉には様々な解釈があり、マルクスの時代にアヘンが同時にモルヒネなどの痛みをやわらげる麻酔として使用されていたことを指摘する説もある³³。この解釈自体にはさらに検討の余地があると思われるが、アヘンを麻酔とらえるアイデアは大変示唆的である。現在終末期医療において、QOL（生命・生活の質）を重視して自分らしく生きるための緩和ケアに麻酔が大きな役割を果たしている。これまでの痛みを伴う延命治療一辺倒の医療が見直され、麻酔医療の発展とともに痛みをうまくコントロールしながら自分らしい生き方を全うするという医療実践がいくつも報告されている³⁴。「死後の世界＝他界」を考える宗教文化も、工夫の仕方によればこの緩和医療のように、よりよく生きるために重要な役割を果たし得るのではないだろうか。

例えば、あるホスピスでターミナルケアの一つとしてエイズの終末期の患者に対して人間が死

んだ後の状況を描いたチベット仏教の『死者の書』を紹介するという試みがなされていた³⁵。この時の状況を放送したテレビ番組では、非常に穏やかな顔で『死者の書』を受け取る患者の姿が映されていた。もちろん、この患者の本当の意味での心の支えになったのかどうかはこの番組の断片的なシーンだけでは分からない。だが、少なくともこの患者の逃れられない死という「現実」と向き合いつつ残された時間を生きる上で何らかの力になった可能性はある。また、死を目の前にした人だけでなく、家族や大事な人を亡くした人の心を癒すことも、このような他界観は出来ると考える。それは、必ずしも特定の宗教の信仰により救われるということではなく、「亡くなった大切な人がどこかに存在して自分を見てくれている」という素朴な生きる希望を支えるものとしての役割を果たし得るという意味である。

以上のように、筆者は「死後の世界を考える」ことは必ずしも意味がないことであるとは言えないと考える。インド伝統医学の医学書『チャラカ・サンヒター』が言うように、「死後の世界を考える」ことは今をよりよく生きるために少なからず役に立つ可能性がある。そして私たち現代日本に生きる人間は、実はそのような今をよりよく生きるための文化的な財産を多く有していることを忘れるべきではないであろう。

◆参考文献（サンスクリット語等の1次資料は略号で記した）

第1次資料

CS: *Agniveśa's Carakasamhitā, Text with English Translation and Critical Exposition, (Based on Cakrapānidatta's Āyurveda Dīpikā) Vol. I*, By Dr. Ram Karan Sharma and Vaidya Bhagwan Dash, Chowkhamba Sanskrit Series Office, Varanasi, 2002 (Rep.).

SN: *The Samyutta-Nikāya of the Suuta-Piṭaka, Part I. Sagātha-vagga*, Edited by M. Léon Feer of the Bibliothèque Nationale, The Pali Text Society, London, 1884 (Rep. 1973).

『大智度論』：『大智度論』『大正新脩大藏經』第二十五卷 釋經論部上・1927年（再刊1962年）

『法華經』：『妙法蓮華經』『大正新脩大藏經』第九卷 法華部全・華嚴部上・1925年（再刊1960年）

『葉師經』：『葉師瑠璃光如來本願功德經』『大正新脩大藏經』第十四卷 經集部一・1925年（再刊1971年）

『古事記』：『古事記 祝詞』日本古典文学体系1（倉野憲司・武田祐吉校注）岩波書店・1958年（1979年第23刷）

『日本書紀』：『日本書紀 上』日本古典文学体系67（坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注）岩波書店・1967年（1979年第14刷）

第2次資料

Sample, Ian: “Stephen Hawking: ‘There is no heaven; it’s a fairy story’n an exclusive, In an exclusive interview with the Guardian, the cosmologist shares his thought on death, M-theory, human purpose and our chance existence” *The Guardian*, 2011. 5. 15.

(<http://www.guardian.co.uk/science/2011/may/15/stephen-hawking-interview-there-is-no-heaven>)

荒木美智雄「現代の来世観」『岩波講座 日本文学と仏教 第3巻「現世と来世」』岩波書店・1994年

- 植木雅俊（訳註）『梵漢和対照・現代語訳 法華経』上・岩波書店・2008年
 同 『梵漢和対照・現代語訳 法華経』下・岩波書店・2008年
 上田正昭『新版 日本神話』角川学芸出版（角川ソフィア文庫）・2010年
 瓜生 中『知っておきたい日本の神話』角川学芸出版（角川ソフィア文庫）・2007年
 鎌田 實『がんばらない』集英社・2000年
 佐々木現順「人間的存在の構造（一）－生と死－」『佛教学セミナー』第14号・大谷大学仏教学会・1971年
 同 「人間的存在の構造（二）－生と死－」『佛教学セミナー』第15号・大谷大学仏教学会・1972年
 定方 晟『インド宇宙論大全』春秋社・2011年
 田中典彦「チャラカ本集における Paraloḥaiṣaṇā ついて」『印度學佛教學研究』第22巻第2号・1974年
 同 「Paraloḥaiṣaṇā－人間存在・生と死－」『日本佛教学会年報－佛教における死の問題－』第46号・日本佛教学会・1981年
 田村晃祐「来世と他界」『岩波講座 日本文学と仏教 第3巻「現世と来世」』岩波書店・1994年
 中村 元『佛教語大辞典』縮刷版・東京書籍・1981年
 同 （訳註）『ブッダ 神々との対話－サンユッタ・ニカーヤⅠ』岩波書店（岩波文庫）・1986年
 同 （訳註）『ブッダ 悪魔との対話－サンユッタ・ニカーヤⅡ』岩波書店（岩波文庫）・1986年
 中村元・早島鏡正・紀野一義（訳註）『浄土三部経（上）無量寿経』岩波書店（岩波文庫）初版1963年（1994年第33刷）
 長谷川宏『初期マルクスを読む』岩波書店・2011年
 原田敏明『日本古代宗教』中央公論社・1970年
 舟橋 豊『古代日本人の自然観』審美社・1990年
 マルクス, カール (Marx, Karl Heinrich)「ヘーゲル法哲学批判序説」(Zur kritik der Hegelschen Rechtsphilosophie. Einleitung' *Deutsch-Französische Jahrbücher*). = 『ユダヤ人問題によせて ヘーゲル法哲学批判序説』(城塚登訳) 岩波書店（岩波文庫）・1974年（2011年第31刷）
 矢野道雄『インド医学概論』科学の名著Ⅲ期1・朝日新聞社・1988年

¹ この区分に関しては、田中典彦「Paraloḥaiṣaṇā－人間存在・生と死－」『日本佛教学会年報－佛教における死の問題－』第46号・1981年3月を参考にした。この田中論文には、この区分だけでなく本稿全体の着想においても大いに示唆を得た。

² パーリ語文献の引用に関しては、原典の本文及び中村元訳の該当ページを記す。なお、引用に際しては必ずしも中村訳に従わず筆者が訳し直した所もある。以下同じ。

SN: p. 2, ll. 26~29 (Upanīyati jīvitam appam āyu || jarūpanītassa na santi tāṇā || etaṃ bhavayaṃ maraṇe pekkhamāno || lokāmiṣaṃ pajahe santipekkho-ti ||) (中村元（訳註）『ブッダ 神々との対話－サンユッタ・ニカーヤⅠ』岩波書店（岩波文庫）・1986年・16頁)

³ SN: p. 108, ll. 14~18 (Bhagavā etad avoca || Appam idam bhikkhave manussānam āyu || gamanīyo saṃparāyo || kattabbaṃ kusalaṃ caritabbaṃ brahmacariyaṃ || natthi jātassa amaraṇaṃ || yo bhikkhave ciraṃ jīvati so vassasatam appam vā bhīyo ti || || Māra-Saṃyutta IV . Dutiya-Vagga 2. S. 9.) (中村元訳註)『ブッダ 悪魔との対話－サンユッタ・ニカーヤⅡ』岩波書店（岩波文庫）・1986年23頁。)

- ⁴ いわゆる「大乘仏教」の文献の中にも、人間が死すべきものだと自覚すべきだと論じるものはある。大乘仏典の一つ『大智度論』では「念死」という概念が論じられている。
「念死とは二種の死がある。一つは自死であり二つは他因縁死である。この二種の死を行者は常に念ずることだ。この身はもし他が殺さなくとも必ずまに自ら死ぬであろう。このような有為法（因縁によって生じる世界）の中では、弾指の頃（ほんのわずかな間）も不死を信じる心を生じさせてはならない。この身は一切時の中に、皆老いることを待たず死があり、この種々の憂悩凶衰の身を持ち、心を生じて安穩不死を望んではいけない。」（念死者。有二種死。一者自死二者他因縁死。是二種死行者常念。是身若他不殺必当自死。如是為有為法中不應彈指頃生信不死心。是身一切時中皆有死不待老。不應恃是種種憂悩凶衰身。生心望安寧不死。[大智度論卷第二十二（智度論：228頁上）]）
- ⁵ 田村晃祐「来世と他界」『岩波講座 日本文学と仏教 第3巻「現世と来世」』岩波書店・1994年・10頁。
- ⁶ 田中典彦前掲書 477頁。
- ⁷ ヤマは地獄における閻魔となった時、もはや死者の保護者ではなく審判者である。定方晟は古い仏教には審判者の思想はなく地獄の責め苦を受けるのは自業自得であったので、この審判者の思想は外来のものとしてゾロアスター教の『アヴェスタ』やギリシャ神話の思想との類似性を指摘する。定方晟『インド宇宙論大全』春秋社 333-336頁参照。
- ⁸ 定方晟前掲書 30頁及び65-70頁。
- ⁹ この大乘仏教の他界観については、全体を通して田村晃祐前掲論文依拠する所が多い。この問題に関しては同10-11頁参照。
- ¹⁰ 『浄土三部経』に関しては中村元・早島鏡正・紀野一義（訳註）『浄土三部経（上）無量寿経』岩波書店（岩波文庫）初版1963年がサンスクリット語からの和訳漢文書き下し文の両方が掲載されており便利である。法蔵比丘の四十八願に関しては同39-43頁及び154-164頁を参照。
- ¹¹ 中村・早島・紀野前掲書 137頁及び237頁。
- ¹² 「然彼佛土一向清浄無有女人。亦無惡趣及苦音聲。瑠璃爲地。金繩界道。城闕宮閣軒窓羅網皆七宝成。亦如西方極樂世界。功德莊嚴等無差別。」（『薬師経』405頁下）
- ¹³ 『薬師経』405頁上一下参照。
- ¹⁴ 田村晃祐前掲論文 13頁。
- ¹⁵ 中村元によれば、この靈山浄土という言葉は日蓮が浄土教の極樂世界に対抗して説いたものである。（『種種御振舞書』966・『持妙法華問答鈔』『高木殿御返事』）中村元『佛教語大辞典』縮刷版・東京書籍・1981年・1429-1430頁参照。
- ¹⁶ 『法華経』に関しては植木雅俊氏の労作『梵漢和对照・現代語訳 法華経』上下・岩波書店・2008年が、翻訳にサンスクリット原文及び漢文書き下し文も併記しており大変便利である。
- ¹⁷ 植木雅俊前掲書下巻 240-241頁及び『法華経』43頁下参照。
- ¹⁸ 『古事記』及び『日本書紀』のテキストに関しては参考文献表に記した日本古典文学体系版を使用した。
- ¹⁹ 上田正昭『新版 日本神話』角川学芸出版（角川ソフィア文庫）・2010年、瓜生 中『知っておきたい日本の神話』角川学芸出版（角川ソフィア文庫）・2007年、及び舟橋 豊『古代日本人の自然観』審美社・1990年第1章参照。

- ²⁰『古事記』上巻（『古事記』50-61頁）。
- ²¹『古事記』上巻（『古事記』69-73頁）。
- ²²田村晃祐前掲論文15-16頁。
- ²³『日本書紀』巻第6 垂仁天皇八十八年七月-九十九年十二月（『日本書紀』279-280頁）。
- ²⁴『日本書紀』巻第6 垂仁天皇八十八年七月-九十九年十二月（『日本書紀』280頁）。
- ²⁵『日本書紀』巻第14 雄略天皇十八年八月-二十三年四月（『日本書紀』497頁）。
- ²⁶『古事記』63頁以降参照。
- ²⁷田村晃祐前掲論文18頁。
- ²⁸原田敏明『日本古代宗教』中央公論社・1970年参照。
- ²⁹ホーキングの英誌『ガーディアン』（2011年5月17日付）へのインタビュー中での発言。ホーキングは、1988年の著書『ホーキング宇宙を語る』では「神というアイデアは、宇宙の科学理解と必ずしも相いれないものではない」と記していたが、2010年の著書『ホーキング宇宙との人間を語る』では宗教に対してかなり厳しい態度に変化した。以下のWebページを参照。
<http://www.guardian.co.uk/science/2011/may/15/stephen-hawking-interview-there-is-no-heaven>
 以下は日本語によるニュース。
<http://www.afpb.com/article/environment-science-it/science-technology/2800427/7226101>
- ³⁰マルクス『ユダヤ人問題によせて ヘーゲル法哲学批判序説』（城塚登訳）岩波書店（岩波文庫）・1974年（2011年第31刷）72-73頁。
- ³¹「しかしながら、人間の健全な精神と知性、そして人間の活力のために、この世界にいて望み求められるべき三つの願望がある。それが、「生命への願望」、「財への願望」、「死後の世界を求める願望」である。」（『チャラカ・サンヒター』11-3） [iha khalu puruṣeṇa_anupahata-bhuddhi-pauruṣa-parākramaṇa hi tam iha ca āmuṣmīś ca loke samanupaśyatā tisra eṣṇāḥ paryeṣṭavyā bhavanti | tad -yathā prāṇaiṣaṇā dhanaiṣaṇā, paralokaiṣaṇa_iti || 3 || (CS: p. 202, ll. 1~2, 20~22.)]
 （サンスクリット語のローマ字表記に関しては、複合語はテクニカルターム以外は単語に分解してハイフンで繋いだ。連声も元の形に戻してアンダーバーで結んだ。）
- ³²このへんについては、長谷川宏『初期マルクスを読む』岩波書店・2011年を209-210頁を参照。
- ³³例えば、「マルクスが言った「宗教はアヘン」とは？」『しんぶん赤旗』2010年7月15日付。
 (http://www.jcp.or.jp/akahata/aik10/2010-07-16/20100715faq09_01_0.html)。
- ³⁴この終末期の緩和医療に関しては多くの文献がある。例えば、鎌田實『がんばらない』集英社・2000年。
- ³⁵NHK取材班『NHKスペシャル チベット死者の書』「第1回ドキュメンタリー 仏典に秘めた輪廻転生」（1993年9月23日放送）。なお、この番組はウォルトディズニースタジオホームエンターテイメントにより2009年1月にDVD化され発売されている。